

能検査、身体測定、および書きこみ法による栄養に関する調査をおこなった。知能分布はプリントを参照されたい。

調査結果の主なものを次に示す。

- 1、出生時における父母の年令と知能との関係は、地方に比し都會の方が遅く子どもが出生している傾向があり、昨年の結果と同様知能の高い子どものグループほど、父母の出産適令期に、子どもが出生している傾向があるようであった。
- 2、出生順位から見ると、知能の高いグループにひとりっ子、長子が多い傾向が見られた。
- 3、妊娠中母親の栄養、離乳食に対する配慮、果汁、肝油の添加など発育に対する栄養上の配慮は、知能の高いグループの方が、低いグループより、いきとどいているという結果が出た。
- 4、離乳の開始時期、乳をすっきり放した時期は、知能の高いグループが低いグループより早くおこなわれている傾向が見られた。
- 5、現在の食生活と知能との関係は、現在の食生活状態の良い者が、知能の高いグループに多く見られた。
- 6、出生時体重は、知能と関係が見られるようであったが、現在体重とはその関係はつきりしなかった。

## 幼稚園における拒食児の一治療 例ならびに人格形成について

お茶の水女子大学

平井信義

千羽喜代子

愛育研究所

野田幸江

五日間の合宿において、良効な治療成績をおさめた一拒食児の症

### 例報告

**主訴** 五才十一か月の女兒、幼稚園で友たち遊びもせず、皆と一しょの机で食事する事を嫌う。一方家庭においても、他人が入ると、ひとり別の部屋での食事を要求するなど、社会性の無さを訴えて母親が相談に来所。

**治療方針** 本児の問題行動が決して *negative* なものではなく、環境から培われたものであるとの見解から、親からの *isolate* およびそれにとまなう *independence* が、これら *ever protection* になっている子どもたちに何らかの良い影響を与えるのではないかと目的でおこなわれた合宿に参加させ、集団生活の *rule* に従わせることによって自我の抑制の為の *training* をおこなう。

**治療経過** 第一日の拒食にも、とりあわずにしていると、二日目からは時々おかずが気にいらぬとの理由で拒むことはあったが、皆と一つの食卓をかこみ食事をするようになり、また一回目には、泣き叫び抵抗した入浴も、一度入れられてからは、それ程の抵抗もなく入るようになった。と同時に、行動も除々にてはあったが活潑さを増し、四日目には、おとなを混えてではあったが友だちとふざけ、大きな声を出すようになった。

**考察** このような短期間の治療成功について二、三の問題をとりあげてみるならば、第一に、診断が妥当であったこと、そして、それが四六時中同じ *situation* の中でおこなわれたこと、寝食を共にするという条件の中で治療者と非治療者の間に *rapport* の成立か十分におこなわれていたことなどがあげられよう。そのような条件の中で体験した快経験が、またそれをやりとげたという自信が一つの洞察となつて外界への *normal* な適応を誘致したものと見れる。